



友の会だより No.35

(2017年12月25日発行)

自転車文化センター

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1

TEL 03-4334-7953 / FAX 03-4334-7958

Email bccask@jifu.jp

OPEN 9:30~17:00 (最終入館 16:45)

CLOSE 月曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始

2018 ハンドメイドバイシクル展

<平成29年度企画催事下記により開催いたします>

- ☆開催日 : 平成30年1月20日(土)・21日(日)
- ☆開催会場 : 科学技術館1階催事場【1号~4号催事場: 東京都千代田区北の丸公園 2-1】
- ☆開催時間 : 午前9時30分から午後4時50分
- ☆入場料 : 無料
- ☆展示内容 : 自転車文化センターが、毎年恒例として開催している「ハンドメイドバイシクル展」。今年度も、日本国内および海外のハンドメイドバイシクルのビルダー、メーカーによる『実車展示』、今回は、出展社数過去最多の50社となり、各々のビルダー・メーカーが、斬新かつ新機構を取り入れ試行錯誤した自転車や、パーツ等の展示となっております。また、開催中ビルダーによる「トークショー」や「主催者特別ブース」での様々な企画を予定しております。
♪皆様のご来場をお待ちしております♪

2017 ハンドメイドバイシクル展の様子



平成29年度自転車文化センター第3回テーマ展示

【女性自転車変遷の歴史展】開催中♪

◆開催期間: 平成29年12月6日(水)から平成30年3月4日(日)

◆開催場所: 自転車文化センターギャラリー・ライブラリー

◆開催時間: 午前9時30分から午後5時(最終入館4時45分)

◆入場料: 無料

◆展示内容: 女性には乗りにくいとされていた自転車は、現在に至るまで、細部に渡り様々な工夫やデザインが施され改善されてきました。各時代を走ってきた実車を、その当時使われていた様子の写真パネルなどと合わせて、分かりやすく解説いたします。当時の背景を思い浮かべながら本展示をお楽しみ下さい。



寄贈資料の紹介

・行川誠様（東京都）	競輪関係『レーサーパンツ他』	計4点
・山内英司様（神奈川県）	風俗画報『第二百六二號』	1点
・瀧川美佐緒様（東京都）	自転車海外情報誌	計16点
・筑間鉄工所様（千葉県）	セキネ自転車	1台

自転車文化センターでは、寄贈された貴重な資料を大切に保管し、テーマ展示等を通じてご覧いただける機会を設けております。

新着図書のご案内

「誰でもはじめられるクロスバイク&ロードバイク」(成美堂出版)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-7」
「88ヶ所国ふたり乗り自転車旅/中近東・アフリカ・アジア・ふたたび南米編」(宇都宮一成・トモ子著/幻冬舎)
「新・自転車“道交法”BOOK」/自転車活用推進法がわかる！」(柘出版社)
「MTB日和 Vol.30/これだけは知っておきたいまどきMTB事情」(辰巳出版)
「図解道路交通法 5訂版」(道路交通法実務研究会/東京法令出版)
「女子競輪物語/青春をバンクにかけて」(原田節子 著/文芸社)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-8」
「BICYCLE PLUS Vol.20/バイクパッキング大会」(柘出版社)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-9」
「弱虫ペダル 51」(渡辺航 著/秋田書店)
「僕のジロ・デ・イタリア」(山本元喜 著/東京書籍)
「びわこ自転車旅行紀(滋賀→北海道編)」(大塚志郎 著/竹書房)
「BICYCLE × TRIP 海、山、街を再発見! 自転車と一緒に絶景の旅へ 2017/自転車と旅特別編」(実業之日本社)
「自転車日和 Voi.44/いつかは行きたい、なんどでも行きたいしまなみ海道」(辰巳出版)
「ロードバイクライディング強化本/速くなるライディングの最新テクニックが満載」(柘出版社)
「とまらない好奇心! 次の旅を夢見て/会社員自転車で世界を走る」(大島義史 著/小学館クリエイティブ)
「アタック/2015年全日本選手権ロードレース」(佐藤喬 著/辰巳出版)
「親子自転車旅のすすめ」(大庭純 著/東京都出版社)
「誰でもはじめられるクロスバイク&ロードバイク」(成美堂出版)
「MTB日和 Vol.31」(辰巳出版)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-10」
「どこがあぶないのかな? 自転車/危険予測シリーズ(渡邊正樹 著/少年写真新聞社)
「クロモリバイク徹底レストアBOOK/スチール黄金時代の自転車を修理して乗りたい」(柘出版社)
「すべてわかる! ロードバイクセルフフィッティング」(コスミック出版)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-11」
「バイクパッキング入門/自転車ツーリングの新スタイル」(田村浩 著/実業之日本社)
「ロードバイクを自在に操るための知識・技術・トレーニング」(浅田顕 著/ナツメ社)
「折りたたみ自転車&スモールバイク旅/小さな自転車と週末プチトリップ」(辰巳出版)
「BICYCLE PLUS Vol.21/人気ツーリングコースガイド」(柘出版社)
「もっとラクにロードバイクで走る/BICYCLE CLUB SELECTION」(柘出版社)
「じてんしゃにのれたよ」(スタジオアタック)
「自転車日和 Voi.45」(辰巳出版)
「おじいちゃんじてんしゃおしえて」(たかはしのりひこ 著/スタジオアタック)
「MOUNTAINBIKE ACTION 32-12」
「自転車ビギナーでも行きたい! 首都圏「絶景」サイクリング&グルメガイド/全30コース62絶景スポット
《自転車メシ》41軒」(オークラ出版)
「美すぎるヒルクライマー日向京子のヒルクライムナビ/ロードバイクで坂道を上がる!」(柘出版社)
「ロードバイクいちからわかるメンテナンス」(柘出版社)
「18クロスバイク購入完全ガイド」(コミックス出版)
「MTB日和 Vol.32」(辰巳出版)
「旅する自転車ランドナーの本」(柘出版社)
「LOOP Magazine Vol.24」(三栄書房)
「ロードバイク最速チューンナップ&メンテナンス」(三泉社)
「弱虫ペダル 52」(渡辺航 著/秋田書店)
「弱虫ペダル 53」(渡辺航 著/秋田書店)
「MOUNTAINBIKE ACTION 33-1」

「B C C友の会」会員募集中♪

自転車に関する書籍など、約 9000 冊を所蔵しています。会員登録をしていただいた方に限り、図書の自由閲覧をすることができます。
会員各位におかれましては、ご友人様などご紹介頂けたら幸いです。

「B C C友の会 1 日利用システム」♪

現在、みなさまにもっと当センターを活用して頂きたい【1 日ご利用システム】を設置しております。
是非、ご利用してみたいはいかがでしょうか!?
ご利用の詳細は、B C C H P 又は B C C までお問い合わせ下さい。

♪ B C C 休館日のお知らせ ♪

★月曜日休館〔祝・祭日の場合は翌平日〕

12 月 29 日～31 日〔年末休館〕

1 月 1 日～3 日〔年始休館〕・9 日(火)・15 日・22 日 29 日

2 月 5 日・13 日(火)・19 日・26 日

3 月 5 日・6 日(火)臨時休館予定・12 日・19 日・26 日

～友の会会員証有効期限のお知らせ～

平成 28 年 4 月から『会員証』更新時期となりました。つきましては、入会日から 2 年間、ご来館のない場合は、無効となりますのでご注意下さい。また、再入会の際は、新たに入会手続きが必要となります。なお、有効期限など不明の場合は、B C C カウンタースタッフまで、お問い合わせ下さい。

自転車文化センターにご来館の際は、必ず会員証をカウンターまでご提示ください♪



科学技術館入館チケット（招待券）プレゼント！

科学技術館（千代田区北の丸公園）「2 F 自転車広場」には、当センター所蔵の歴史的自転車などの常設展示を引き続き行っております。ぜひお立ち寄りください。

♡友の会会員の方に科学技術館入館チケット(招待券)を先着 10 名様（お一人様 2 枚まで）に差し上げます。
自転車文化センター(目黒)にご来館のうえ、インフォメーションカウンターまでお申し出ください。

「女性自転車変遷の歴史展」に寄せて
女性用自転車普及が自転車文化へ与えた影響

BCC学芸員 谷田貝一男

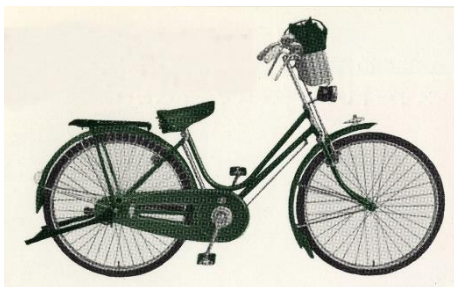
1. 1956年当時の自転車の普及状況

現代において自転車は最も身近な乗物として、幼児から80歳代以上の高齢者まで男女を問わず利用されています。しかし、1956年（昭和31年）において自転車に乗ることができる人の割合は、男性が10歳代後半から40歳代までのいずれの年代においても95～97%で50歳代は79%であるのに対して、女性は10歳代後半が76%で、年代の上昇とともにその割合は減少し、50歳代では13%に過ぎません。しかも自転車に乗ることができて、かつ実際に自転車を利用している人の割合は、男性が66%に対して、女性は25%でその中でも主婦は20%で女性の割合は男性の半分にも満たない状況でした。

また、同年における自転車を持っている世帯の割合は地域差があるものの概ね50～80%で、保有している自転車の車種は実用車が75～90%に対して軽快車は2～5%、女性用車は最高でも20%を越えることがなく、全国平均で8.4%でした。

他方で当時の自転車メーカーには厳しい経営環境に立たされていました。その理由として、購入目的が新規需要から代替需要への移行、輸出台数の10万台以上の減少、消費者物価指数の上昇にも関わらず小売価格はほぼ一定で推移、エンジン付きバイクとの生産台数比率が約2分の1まで縮小、1954年後半から始まった神武景気による鉄鋼資材の高騰にも関わらず価格の引き上げができないことによる利益の減少等が挙げられます。

そこで、これを打開する手段の1つとして自転車メーカーは女性の中でも乗ることができる割合が高いにも関わらず利用率の低い20代の主婦を対象にした自転車の製造販売で新たな層の開発を行い、全体の保有台数の底上げをめざしました。そのための方針は自転車を花嫁道具として購入することを勧め、その結果として買物に便利でしかも美容と健康に役立つということをアピールし、1956年から販売を開始しました。その中の1台が山口自転車から発売された「スマートレディ」です。



「スマートレディ」



1960年頃の花嫁道具に「スマートレディ」がある

このような自転車メーカーによる販売戦略効果によって1962年には54%の花嫁が花嫁道具の中に自転車を入れ、その道具としての順位は和洋筆筥、鏡台、下駄箱、洗濯機、掃除機、冷蔵庫に次ぐものになりました。また、既婚者、未婚者の別なく76%が花嫁道具として自転車を必要と思っており、この頃には自転車が日常生活に欠かせないものになっていたことがわかります。

2. 女性向け自転車の形態変化

女性用自転車の普及に向けて、1955年以降女性が乗りやすく利用に便利な自転車の開発が多方面から進められました。

車体の型式は足を大きく上げて乗る男性用のダイヤモンド型ではなく足を大きく上げる必要のないループ型とし、ハンドルはフラット型ではなくアップ型にしました。重量はダイヤモンド型が平均24.0kg、1960年以前の女性用が平均23.5kgに対して、1961年以降の女性用は平均18.0kgと軽量化されています。またこの当時はハンドルの前にかごが付いている自転車は皆無でしたが、「スマートレディ」など一部のメーカーの女性用では最初からかごを付けていました。さらに、車体の色も男性用ダイヤモンド型は1色で1960年以降は2色も増えましたが、1色並びに2色のうちの主となる色は寒色系であるのに対して、女性用ループ型は当初から暖色系の2色で、

1960年以降は明るい色が多く使われるようになりました。



フラット型ハンドル



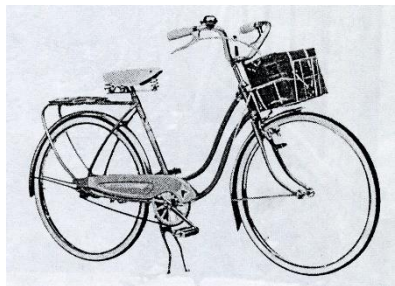
アップ型ハンドル



ナショナル「ビューティ」1958年



富士「マミー」1960年



川村「フラワーレディ」1963年

3. 女性用自転車の普及が自転車文化に与えた影響

◎女性用自転車の占有割合の上昇

1955年から1964年までの10年間に、すべての車種の自転車に対する女性用自転車の占有割合を売上台数と購入台数からまとめるといずれも毎年上昇し、1964年にはほぼ半数を占めるまでになりました。

	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年
売上台数より	14.1%	16.3%	31.3%	35.5%	38.1%	—	39.3%	39.7%	43.1%	49.8%
購入台数より	—	—	—	32.0%	48.7%	40.6%	53.4%	49.9%	55.7%	56.6%
国内総保有台数(万台)	1392.8	1564.7	1600.5	1681.5	1815.8	1955.9	2078.5	2195.2	2293.1	2376.5

◎自転車に乗ることが出来る女性の割合の上昇

自転車に乗ることが出来る女性の割合が1968年には40代までが50%を超え、50代では女性の割合の伸びが男性の伸びよりも大きくなりました。調査方法が異なるため1956年とは単純に比較することはできませんが、12年間の経過による各年代の移行を考慮に入れても女性の各年代で割合が上昇し、特に30代、40代の上昇が大きくなっています。

		10歳代	20歳代		30歳代		40歳代	50歳代	60歳代
			前半	後半	代前半	後半			
1956年	女性	75.5%	67.8%	54.6%	46.2%	37.0%	18.2%	13.4%	—
1968年		88.5%	90.2%		77.7%		62.6%	33.6%	10.7%
1956年	男性	96.6%	96.5%	97.3%	96.8%	94.6%	95.1%	78.8%	—
1968年		98.4%	99.0%		98.3%		97.4%	93.0%	67.8%

◎自転車利用者の男女別割合で男女がほぼ同じ割合になった

自転車利用者の男女別割合は1958年では女性33.3%男性66.7%でしたが、女性用自転車の普及により、1964年になると女性47.4%男性52.6%と男女がほぼ同じ割合に近づいています。

◎男性がダイヤモンド型からループ型・パラレル型・スタagger型 of 自転車に移行

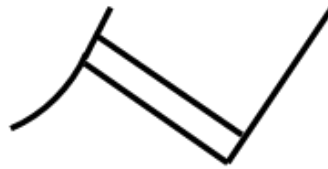
現在、通勤通学や買い物として多くの人に利用されているシティサイクルと呼ばれる自転車の車体形式には、ループ型・ダブルループ型・パラレル型・スタagger型・U型などがあり、男性・女性という区別なく利用されています。



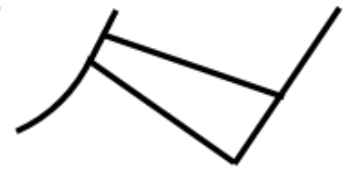
ループ型



ダブルループ型



パラレル型



スタグガード型

U型は曲線状のフレームが1本のみ

主として1957年から1960年の間に撮影されたスナップ写真を使い、それに写っている自転車に関する調査を行った結果が次の通りです。

全台数：693台

ダイヤモンド型：370台（54%）

パラレル型・スタグガード型：199台（29%）

前かご 取付形：1台、オプション形：49台

ループ型・ダブルループ型：117台（17%）

前かご 取付形：0台、オプション形：28台

ミキスト型：6台（1%）

U型：1台

前かごを取り付けた自転車は全台数の11.3%

女性が利用している全台数：179台

ダイヤモンド型：60台（34%）

パラレル型・スタグガード型：54台（30%）

ループ型・ダブルループ型：63台（35%）

ミキスト型：2台（1%）

前かごを取り付けた自転車は女性が利用している全台数の24.7%

乗りやすく使いやすい自転車の開発はその乗車対象者を女性から中高生や男性まで広げ、その結果として1959年からフレームがパラレル型やスタグガード型が増加し、1964年になると男性もダイヤモンド型ではなくパラレル型やスタグガード型の男女共用やループ型・ダブルループ型の女性用の自転車に乗る人の割合が64.2%に達しています。

これに対して女性が男性用のダイヤモンド型の自転車に乗る人の割合が1964年にはまだ35.8%もいます。反対の性用の自転車に乗る理由が男性と女性とでは異なります。男性が女性用自転車あるいは男女兼用自転車を利用するのは乗り易いため、あるいは家族みんなが利用できるから一家に1台所有する場合には男女兼用自転車を購入するという理由が主です。これに対して女性が男性用自転車に乗るのは、1967年においても女性の30.4%、男性の36.2%が自転車の価格が高いと考えていることから女性用自転車あるいは男女兼用自転車の購入を見合わせて、すでに所有している男性用自転車を利用せざるを得ないという理由からです。



左:スタグガード型 中:ループ型 右:ダイヤモンド型

かごは別売り 1959年～60年頃



1959年～60年頃の様子 静岡

◎前かごが普及した

1960年前後の女性用自転車には、あらかじめ前かごが設置されて販売された自転車と前かごなしで販売され

た自転車がありました。あらかじめ設置されて販売された台数を1955年から10年間のカタログで確認すると、その割合は14%で販売数全体から見ると少なく、割合の数値も10年間ほとんど変わりません。

しかし、前かごを設置した女性用自転車の販売が始まると、前かごが設置されていない自転車のためにオプションで前かごを取り付ける人が多くなってきました。その設置率は前述のスナップ写真に写っている自転車693台を調査した結果、ループ型・ダブルループ型と平行型・スタッガード型を合わせて25%で、ダイヤモンド型では1台もありませんでした。女性用自転車に前かごを取り付けて利用する人が多くなってきた1960年以降になると、各自転車メーカーはキャリアに取りはずしができるバッグや網かごを取り付ける方法から、金属棒でかご枠を作り、その中にバッグを入れる方法を取り入れるようになってきました。かご枠は現在の前かごの設置方法と同じで、ヘッドラグで留めたキャリアステーを前輪の車軸に取り付けています。バッグは主にビニール製で、かごから取り外して買い物用バッグとして利用することも出来ました。前かごが標準装備になるのは1960年代後半のミニサイクルの登場からです。



オプション用前かごをハンドルに引っ掛けて利用



かご枠の中にバッグを入れる方法 1961年

4. 1965年以降の自転車文化の変化

1965年頃から車輪径が20～22インチのミニサイクルと呼ばれる車種が登場しました。生産台数が当初は年1万台に届かなかったのが、1967年4万台、1969年50万台、1971年100万台と急増を続け、1973年には280万台で全車種（子供車を除く）の40%を占めるまでになりました。

なぜミニサイクルがこんな短期間に急速に普及したのでしょうか。これまでも各書でその理由が述べられていますが、ここでは年齢別に購入の割合の変化を見てみます。26インチの女性用自転車と20～22インチのミニサイクルの占有割合を10歳代、20歳代、30歳代以上に分けて1969年から1975年までの1年ごとの車種別割合の変化をまとめて表すと次のようになります。

		69年	70年	71年	72年	73年	74年	75年
10歳代	26インチ女性用自転車	60.8%	63.2%	55.4%	52.3%	—	45.0%	44.4%
	20～22インチミニサイクル	39.2%	36.8%	44.6%	47.7%	—	55.0%	55.6%
20歳代	26インチ女性用自転車	49.1%	44.1%	42.5%	44.9%	—	49.9%	50.1%
	20～22インチミニサイクル	50.9%	55.9%	57.5%	55.1%	—	50.1%	49.9%
30歳代以上	26インチ女性用自転車	49.0%	50.4%	53.3%	56.6%	—	57.6%	57.4%
	20～22インチミニサイクル	51.0%	49.6%	47.5%	43.4%	—	42.4%	42.6%



ミニサイクル「富士ベガファイン」1972年



女性用自転車「富士シルビアファイン」1972年

ミニサイクル発売当初は1台あれば一家の誰でも乗ることができる自転車として10歳代を含めた広範囲の世代

を対象にしていたが、実際には20歳代以降が中心として販売され、特に30歳代以降ではミニサイクルが51%を占めていました。しかし、1972年以降は女性用自転車が増え、1974年以降は50%を超え、56%までになっています。こうした傾向により、1972年から1973年にかけてミニサイクルが特に急増した原因として10歳代後半から20歳代女性の購入が大きく影響しているといえます。

このような状況下、1973年に24インチの女性用自転車が登場し、従来の女性用自転車とミニサイクル両車種の車輪径の接近化が始まりました。また、フレームの形状変化も1973年頃から現れてきました。26インチ女性用自転車はループ型であったのが、ダブルループ型の増加とフレームが1本のU型が登場しました。24インチミニサイクルはループの1本フレームながらサドル下との接合部が高くなっています。これらのことから女性用軽快車と呼ばれた女性用自転車とミニサイクルの統合が始まり、これが現在のいわゆるシティサイクル、俗にママチャリとも呼ばれている自転車につながっていくことになるのです。



ミニサイクル24インチ



女性用軽快車22インチ



女性用軽快車24インチ

ナショナル「フルール」1974年

ナショナル「ミディ」1975年

ナショナル「ビューティ」1973年



ミニサイクル24インチ

富士「ベガ」1977年



タウンサイクル25インチ

富士「プランタン」1977年



女性用軽快車26インチ

富士「ハイレディ」1977年



ミニサイクル22インチ



ミニサイクル24インチ



ミニサイクル26インチ

ブリヂストン「Love Love 222」1976年 「Love Love 242」

「Love Love 262」

上の各写真に添えられているミニサイクル・女性用軽快車・タウンサイクルの区別並びに各車種の愛称名はメーカーのカタログに記載されたものです。このように1970年頃になると女性用軽快車とミニサイクルの区別が車輪径によるものではなく、メーカーごと・車種ごとに異なり、女性用自転車とミニサイクルの統合が始まったことが分かります。

自転車文化センターは、競輪の補助を受けて事業を行っております。